

楽しい山形の「歩く旅」

■ 東京都渋谷区 矢口正武 67歳

「東北紀行文学・尽きぬ興味」と題して作家の藤原作弥さんが山形新聞に寄稿しているのを楽しく拝読させていただきました。私は「イザベラ・バードの山形路200キロ」を何度も訪ね歩き、歴史、文化、景観やその土地で出会った人々の優しさに触れることができ、あらためて、ふるさと山形の魅力に引かれています。

東北新幹線に乗る楽しみの一つに備え付けの車内誌「トランヴェール」があるを紹介していました。最近の特集「さあ、旅立とう冒険者たちよ」(8月号)で、日本奥地の旅をして克明な記録を残した一人に「英国人のイザベラ・バード女史がいた」と続きます。6月、そのトランヴェ

ール誌のライター、カメラマンさんを山形に案内する機会がありました。彼らも、山形路の景観の素晴らしさにシャッターを押すのも忘れ見とれていま

した。
東北を旅した芭蕉を、嵐山光三郎さんは「幕府の諜報員」としての任務があったとして著書「悪党芭蕉」を書いていますが、知人で大手新聞社の元写真報道部長だった横浜在住のFさんと「バードの山形旅」をした時、バードは「イギリス

の諜報員」だったと面白い解説してくれたのには思わず納得したことを思い出しました。

彼ら(彼女)の足跡を訪ね歩くことでその時代に思いをよせ、「歩く旅」の醍醐味(だいごみ)を十二分に味わうことができます。来年5月、イザベラ・バードの山形路200キロを完全徒歩することを目指しています。

